

キツネの宝くじ

美作 杏

皆さんは、この世界に化けるキツネが実在すると思いませんか？

化けるキツネ、つまり妖狐ようこがいるなど嘘だ。と思うかもしれませんが、

これは僕の実験の体験なのです。それは、僕が小学五年生の夏休みも終盤に差し掛かった時の事でした。

「母ちゃん。母ちゃん。敬たかしと山行たかしつちくる」

「あんた、宿題したと？ 最近なんごご(遊び)すぎちゃが？」

「し、したじ——！ じゃあ行たかしつちくる——！」

嘘だ。宿題なんかここ最近見てもいないし、どこに置いたかも忘れてしまった。俺は、母ちゃんに嘘をつくなんてことはめったにない。俺は母ちゃんが好きだ。父ちゃんが出稼でせぎに行たかしってしまって、ここ何か月も家にいない間も、明るく、時には鬼のような顔で僕を叱なって、女一人でこの家を守っているのだ。だから、俺は母ちゃんに嘘をつくなんて卑怯へきせつなこととはしたくない。でも、俺にとって夏休みはどうしても特別な行事なのだ。

「だあ！ 太吉、遅えよ！ もういなくなつちよるかもしれんぞ！」

「あ、あはは(ごめん)。はよいっせ(早く行こう)」

ゼエゼエと息を切らせながら、急な山の斜面を背丈ほどにもなる雑草をかき分けて登あっていく。敬は俺より一歳年上で運動が良くできるので、ひよひよいと進んでいるが、俺は昔から体が強くない。いや、むしろ弱い方なのだ。

やつのことで、目的の場所へとたどり着いた。そこは、アカネスミシの絨毯じゅうたんの中に、ブナの大木がところどころに立っている。とても幻想的なところだ。

大きく一回深呼吸をして、俺たちはさっそく昨日のうちに仕掛けておいた、蜜ミツの場所を一つ一つ確認していった。

「どんげだ(どうだ)そっちはいたか？」

「いかん(ダメだ)やっぱりもう少しはよ来んといかんか……」

「まだ諦めるな！ きつといるはずだ！ おいのじいちゃんは見つけたのだから」

「それもまこつ(本当)か分からんぞ、敬。銀色に輝く糸を付けた羽を持つ蝶なんて、どげんか本にも載のっていんだぞ」

でも、見てみたいという好奇心は僕にもありました。

敬のお祖父さんが見たという銀色の糸の羽の蝶……つまり幻の蝶は、実は、この村にずっと伝わる話なのです。その話によると、その幻の蝶はこの世のものとは思えないほど綺麗な深い青色の中を銀色に光り輝く線が、自由にあっちこちに走っているというのです。また、それを見た者は、この先の人生で最高に良い事か、もしくは最高に悪い事があるかもしれないのです。

そして、小学生だった僕たちが何とんでも見つけたと思うのは、その幻の蝶がもたらす最幸か最悪は、小学生の子ども見つけた時にしか発揮しないからなのです。敬のおじいさんは中学一年生の夏に見つけたそうなので、九十五歳で老衰されるまで全く何も起きなかった。と敬は言っていました。

そしてもう一つ、僕たちが夏休みにこだわる理由は、その幻の蝶は夏にしか姿を現さないのと、六年前、当時小学六年生で村でも有名な悪ガキだった四人の男の子たちが、幻の蝶を探している途中に山で遭難してしまつた事件がありました。学校はもちろん休校、そして村総出で探した結果、二日後に無事に救出されたことがありました。もちろん僕も敬も大人たちと一緒に探しました。

その事があったので、翌年より“幻の蝶を探すのは夏休みの間のみ”という村のルールが出来たため、夏休み以外に子どもたちだけで山へ行くのは禁止になってしまつたからなのです。

「これで最後の木だな……。頼む！ いてくれ！」

俺はブナの大木の幹によじ登あって、蜜を塗ぬつた場所へと登あつた。

「……やっぱりいけんか……。くそう、夏休みもあと十日しかんち(ないのに)。今年がいかんかったら、来年の一年間しかチャンスがらんち……」

俺はガツクリと肩を落として、木から降りようとした。手で木の枝を

掴んだとき、何か布のようなものが当たった気がした。なんだろうと思つてみると、それは綺麗な深い青色のリボンのようだった。誰がこんな所に掛けたんだ？しかも毛がいつぱいついてら。

……まあ、綺麗だから家に持って帰って母ちゃんにでもあげようか。俺はズボンのちようど当て布がほつれてできた穴に、その青いリボンを通してキュツと結んだ。そして、いつものように、恐る恐る大木から下へと降りていく。実は、俺は高いところは苦手なのだ。だから、いつも敬が木のとても高いところからピョンと降りるのがとてもなく羨ましい。敬のように俺ももっと男らしく振舞えたらなと思つている。

——とと、危ない。足がすべっ——うあああああ！
一瞬、自分がどうして空中を舞つているのかが分からなかった。多分、塗つていた蜜に足がちようど当たつて滑つてしまったのだらう。しかしそんなことを思つている間にも、自分が蝶のように空中を舞つていることの重大さが少しずつ分かつてきた——。

「あいたたたあ……やべえ、足を痛めちまつたか」
気が付くと、いつもは絨毯のように踏み歩くアカネスマシレが今は自分の体よりも上にあつて、いつも踏んでくれるわね！——とでも言いたげに俺の視界を埋め尽くしている。

敬は、どこだ。二手に分かれて探したため、敬が今どこにいるのかが分からない。しかも、今は自力で体を起こせないから、どうにもこうにも自分の居場所を伝えることが出来ないのだ。

「お——い。太吉い。そろそろいぬるじ(帰るぞ)——」

太吉はここだ、敬！気づいてくれ！
「あれ——？ いねえな。先に帰つちよるんか？ まこち(まつたく)、ひと声かけるじ——、アイツは……」

ちがうちがう、そうじゃない。敬がいないと俺今日ここで一夜を明かさないといけなくなるんだ。つて、おい！帰るなよ——！！

遠くで敬がアカネスマシレを踏んで歩く音が聞こえる。そしてその音もやがてなくなると、本当に一人ぼっちになってしまった。夕日に染まるアカネスマシレをほうっと見ながらこれからどうしようかと思いを巡らせてきた。多分この後、敬が俺の家に来るだらう。でも母ちゃんはまだ帰つてきていないと言つ。どこに行った！？ となつて……また村総出の搜索になるのか？

……さてよ、そうなるにあの村長のことだ、きつと「もうこれ以上幻の蝶とやらに夢中になつて、子どもたちが行方不明になるのはいかん！翌年から幻の蝶探しは禁止だ！もし、ルールを破つた者はこの村から出て行つてもらおうじ！なんて言いかねないぞ。

どうしよう……なんとかして、ここから帰らないと。

しかし、思いのほか落ちた場所が地面から高く、結構なケガになつていそうなのだ。ああ、もつと敬のようにもつと運動がよくできたら……もつとたくましかつたら……もつと……もつと……

「あれ？ 何をしたはるん？」

「なんもしてんじ……見よーねえ分かるやろ(見たら分かるだろ)！こん木から落つちこちで足痛めちまつたんだよ。ほれ、敬、はよ助け……つてあれ？」

つつきり自分の頭部らへんから聞こえてきた声の主は敬だと思つていたが、どうやら俺と同じ年頃の娘だった。

「すいせんけんどん、誰か村の人を呼んでくれないか。この木から落つちこちで足を痛めちまつたんだ」

「ここさかい落つちちたん！？ それはえらいこつちや！ とりあえず体おそこない」

そう言つてその娘はゆっくりと俺の体を起こしてくれた。

久しぶりにアカネスマシレが自分の上からなくなるのと引き換えに、オレンジ色の夕日がすっかり一面に広がるアカネスマシレの絨毯を同じ色に染めていた。俺は親切にも助けてくれた娘に、ありがとうと言おうとしてその娘の方に振り向いた途端、言葉を失つた。

何て美人なんだ！！

透き通るようなきれいな声。

純白の整った顔。

そしてリンゴのようにその白い顔を真っ赤に染める頬。

風にサラサラとなびく長い黒髪。

肌の色に負けないほどの白い服を身にまとつた華奢な体。

片手で折つてしまえそうなくらい細い四肢。

こんな美人な娘なんてこの村にいたか？

「て、てげ美人や！！！！」

「ふふ。おおきに。うちは朱音どす」

「お、おい……俺は大吉だ……“どす？” って……な、なんね？」

「ふふ。こら、京都弁どす」

「キョウト？ 近畿とかいう所の言葉か？」

「そうや。……でも、なんで木なんか登ってはったん？」

「蝶。幻の超や」

「ち、蝶？」

「ほうや。こん山には昔からまこち綺麗な蝶がおるんじ。それは、綺麗な深い青色の中を銀色に光り輝く線が、自由にあっちこちに走つちよるそうなんね。また、それを見た者はこん先の人生で最高に良え事か、もしくは最高に悪い事があるかもしれんのやと。俺はずーっとそれを探し続けちよる」

「……ふうん。そないにその蝶見たいん？」

「あたりまえじゃろ！ そのせいでこげんなに身体をはっちよるんや。

てげ好きな母ちゃんにまで宿題したつなんて嘘ついて……」

「じゃあ、もしそん蝶が見れて、あんたがその最幸とかいうやつを手に入れはったとき、何が欲しいんや？」

「俺がもし最幸を手に入れたとき？」

「そうや」

「具体的には……なんも考えてなかったんだれどげんか。じゃつどな(そうだな)、母ちゃんにうめえもんをお腹いっぱい食べさせて、綺麗な服を着せてあげることだ」

「ふうん。……じゃあ、そん蝶とやらを見したろうか？」

「んな！？」

「ちよつと待つときな」

「へ？」

そう言つて朱音はどこかへ行ってしまった。俺はさつきからドキドキといつてうるさい心臓を、必死に落ち着かせて、朱音が戻ってくるのを待った。どういふことだ？あの幻の蝶を見れる！？」

というか、“見したるか”ってどういふことなんだ！？一人考え悩んでいると、朱音が戻ってきた。

「ほら。これやろ？ 太吉が見たかった蝶は」

そう言つて朱音がバツと手を開けると、身が引き締まる思いがした。

こ、これがあの伝説の蝶……なんて綺麗なんだ！ 確かに綺麗な深い青色の中を銀色に光り輝く線が、自由にあっちこちに走っている。し

かし、それは噂に聞いていたよりも格段と凄かった。

「てげ綺麗……なんかもうこれが最幸みたいじ」

「うちと、どつちが綺麗や？」

「そりや朱音に決まっとう！」

朱音はバツと頬を赤らめて、「冗談や。せやけど、おおきに」言つと顔をアカネスミレの中に突っ伏してしまった。

「お！ もうこんな日がかけつちよったか。それじゃあ俺は帰らないと……あいたた」

そうだ、いまケガしていたんだつた。どうしようか。

「そうや、ケガしてはったんやつたな……太吉、ちよつと目え閉じとつてくれんか？絶対開けたらあかんぞ？」

「いいけどげんか(いいけれど)……どげんやつて(どうして)？」

すると、「ふふ。うちがええよ、と言つてから目開けたら分かるわ」と言つて朱音は俺の両目に手をかぶせた。ふううつと朱音が俺の足のけがをしてる個所に息を吹きかけた。何だかこそばゆくて、ムズムズして

いると「ええよ」と言う声があった。俺はゆっくりと目を開けると、またもや絶句してしまった。何とさつきまで流血し、アオタンまでできていた痛々しかった足は、傷一つない足に変身しているではないか！

「どどど、どない手を施したんや！？」

「ん、どや？ これでもう痛くないやろ？」

「じゃつけどげんか(そうだけど)……てげな。おおきん(ありがとう)。

じゃつと(そうだ)、お礼にこれあげる。さつきひろつたんじゃけど」

俺はさつき木の上で見つけた青いリボンを腰から外すと、朱音に渡した。すると、朱音はすごい勢いでリボンをガシツと掴んだ。

「こ、これうちのやわ！ いやあ、おおきに！ 探しとつてん」

「なんだ、朱音のだったのか。見つかつてよかつたな」

こくつと嬉しそうにうなずいた。その時、ここより少し下の方で、敬と母ちゃんの声があった。

「あ、母ちゃんどんだ！ そろそろ帰ろう」

「……うちは、まだせなあかんことがあるんや。太吉、今日は楽しかった。明日もここに来てくれへん？」

「もちろん！じゃあまたな」

俺は行きと同じようにアカネスミレを踏み散らして、勢いよく斜面を駆け下りて行った。

「おーい。敬——！」

「太吉？ 太吉か！ もう心配したつぞ。どげんかここにいたんだ！」

「ブナの木から落っこちて動けなかったのだ。でん、心配はいらん。朱音が傷を治してくれたからな！」

「……朱音？ 誰だそれ？」

「てげ美人な娘だ……じゃあいえば、どげんかこんな家が聞くのを忘れたな……」

「もう、太吉！ これ以上、母ちゃんを心配させんでね」

「あはは、かあちゃん。任せだあて」

次の日も俺は、昨日朱音と出逢った場所へ行った。

「勘忍な。来るときにちよつとイノシシと鉢合わせになってしもうて……」

俺よりも少し後に来た朱音は、ゼエゼエと息を切らせてそう言った。

「イノシシ！？ いっちゃがじゃつたと(大丈夫だったのか)？」

「ふふ。そら、全速力で走って来たわ」

「じゃあいえば、朱音の家はどげんかここにあんと(どこにあるの)？」

「……こん山や」

「こん山？」

「そや……太吉、今からうちが言うことは、絶対にほかの人間には言わんといてくれる？」

「いいけどげんか」

そう言うと、朱音はふううと息を深く吐いてゆっくりと話し始めた。

「実は……うちは人間やない。キツネやねん」

「ぎ、キキキツネエエ!？」

「そや。でもそこら辺にいるキツネとは違う。うちの家は化けることができるキツネ、つまり妖狐なんや。ちなみに昨日見たあの蝶は、代々、家の大事な蝶なんや。まあ、いまはうちのものやけど。あと、昨日言つてたその言い伝え？ あれは全くの嘘やで。多分、物珍しいからそうな

ったんとちゃう？」

ちよつと待てよ。妖狐？ キツネなんてどれも同じだろう。

「……妖狐は何か特別なのか？」

「普通んキツネは黄色、せやかて妖狐は銀色でおす。妖狐は普通んキツネより格上や。まあ、人間社会で言うたら妖狐は村長みたいなもんや」

「そら、俺に言つてじーかったのか(よかったのか)？」

「……太吉。うちは太吉を信じてるんや。うちはな、今までぎょうさん人間に会つてきた。みんな蝶ん話をするんにやけど、どん人間もみんな自分勝手……なんや悲しくなつてしもうて。やて、太吉はちやうくて、お母ちゃんのためを想つとつたやろ？ ほして、うちは、ああ、こん人なら言うてもどもないって思えたんや。やて、もし太吉が村人にならうて妖狐と言つたら、よう(もう)二度と会えなくなるよ？」

「そげんなあ。どげんやつて(どうして)？」

「うちの親戚に、昔おんなじように人間に言わはつたもんがおつたんや。やて、そん人間は狩人やつた。結果、そんもんは殺されてしもたんや。それさかい、うちらには必要以上に人間に近づかへんのや」

「うちのこと、かなんい(嫌い)にならはつた？」

「なるわけないやろ。俺は朱音をそげんな目に合わせん！」

おおきに。と言つてはにかむ朱音はやはり俺の中で一番綺麗なのだ。

僕と朱音は来年の夏休みに会う約束をして、僕の小学五年生の夏休みは終わりました。約束の夏休みまでは、母ちゃんの手伝いや農作業をして忙しく過ごしていました。が、どんなに忙しくても朱音のことだけは忘れまいとしていました。あの冬の日を除けば。

「最近、夕方になると一段と冷えよる。はよ家帰らんと母ちゃん家で待つちよるなあ。」

俺は収穫したての野菜を籠に詰めて足早に家へと帰っていた。重たい荷物を背負って、やつとこのことで家の前までたどり着いたとき、ふと前を見ると家の前で何かがモゾモゾと動いていた。

「何じやろかい？」

俺は荷物を家の扉に置いて、それに近づいた。

「キツネ？なんでこげんなところに……待てじ——。もけんどんて(もしかして)朱音!？」

キツネはコクつと頷くと、「うちについてこい」と言うようにして山の方へ駆けていった。俺はハツとした。

「こげんな時に朱音が人里へ降りてくるなんて。何かあつたんじやろか？」

夏休み以外は立ち入ることが禁止なのは分かっていたが、俺は、そのキツネの後を追って山の中へ入った。しばらく進むと、またあの場所に着

いた。ここまで来れば、見つかる確立はまだ少ない。

「朱音！！どんげかしたつのか？」

「太吉！会おいやしたかったよ！実は今、食べるもんがなくて、ここ三日なんもたべてへん。何や持ってへんか？」

俺は、「ちっと待ち」と言っつて、腰に携えていた笹の葉にくるんだおにぎりを取り出した。

「これは、母ちゃんが作ってくれたもんじゃけど、おにぎりって食べてもいっちゃが（大丈夫）？」

「おにぎり！うちの大好物や！たべてもええか？」

朱音は勢いよく、おにぎりにかぶりついた。よっぽど空腹だったのだから、三口で食べてしまった。

「そげんな、山は食べちよる物がん（ない）のか？」

「せや。そういえば、夏休み以外は山に来たらダメやった？」

「じゃっどげれどげんか（そうだけど）……朱音に何かあったんじゃろかと思っつて」

「実は、うちの親が京都にある妖狐の里に行つとるんよ。せやから、今は一人しかいなくて……頼れるのが太吉しかいないんや」

「じゃあか。そら寂しかったじゃろ。今の時期だから山に行くこつはできんけれどげんか、ときどげんかきなら山を下りた所に、朱音が食べられじゃあなもんを置いておくから。でかいよどんげかなりじゃあか（それで何とかなりそうか）？」

「ええん！？そないなことまどしてくれて、ほんまにおおきに……太吉」

「な、なに？」

「実は、うちは、た、太吉のこんが……」

「俺が？」

「その……す……」

そのとき、俺の後ろでガサガサという音がした。おれはとっさに自分の後ろに朱音を隠した。

「だ、誰や！？」

すると、ぬっと現れた人影が月に照らされた。

「……敬！？」

「太吉、こげんなとことで、なんやつとちよるんや！夏休み以外は山に登つよーねえ（たら）ダメだといわれちよるじゃろ！？」

「あ、あはは（ごめん）。すぐいぬるからだれにも言わんでくれ！！」

そう言っつて動こうとしたが、後ろに朱音がいることを思い出した。

「どげんしたんや、なんで立たんと？何か後ろに隠しちよると？」

「なななんも隠してん！」

俺はキッと敬を睨んだが、敬はお構いなしに俺に近づいた。

「て、てげ美人！だれや。太吉の女か？」

“太吉の女”に俺はポット赤くなつたが、すぐに冷静に考えた。とうとう見つかってしまった！ここで朱音の正体をばらしてはいけないのだ。

俺の肩に触れた朱音の手はがたがたと震えていた。

「う、うちは、朱音どす」

すると、敬の後ろからもう一人、人が現れた。

「京都弁……さては、わや（お前）妖狐の一族だな！？」

「米部^{よねべ}じい、なんでここに！？ 敬！どんげいうこつだ（どういうことだ）！」

「ちようどげんか太吉が山へ入つていくのが見えて。おい、跡を追おうとしたつら、米部じいがちようどげんかいて……一人は怖かつたから一緒に来てもらったのだ」

米部じいは、この村一の狩人なのだ。これはまずい。

「太吉、わや自分のしちよるこつが分かつちよるのか？ 夏休みでんち山へ来て、しかも妖狐なんて人間を騙す最低な生き物じゃぞ！！」

「じゃもんか（違つ）！ そらじゃもんか。妖狐は最低じゃあん。どんげやつて、じゃあいうこつを言つと（なんでそういうこつを言つと）？」

「わしの曾祖父は、かつて妖狐を殺したこつがあつた。けんどん、それ以降その妖狐のたたりが曾祖父を襲つた。毎晩、自分の血で作つた血海

の中で、妖狐に自分の肉を咀嚼^{そしやく}される音を聞きながら、死んでいく夢を見続けたじやつと」

朱音の手が一層震えを増していた。

「……そら、そん狩人がうちの子孫におんなじことをしたんではおまへんん？」

「！う、しゃあしい（うるさい）！わやは黙つておけ！」

そう言つと、米部じいは肩にかけていた狩猟用の銃を手を持った。

「太吉。撃たれたくなかつよーねえ（なかつたら）、そこをどげんか！」

「何でじゃあなるんだ。どげんやって(どうして)殺すんだ。朱音は何もわりいこつをしちよらんち。俺はどげんかかんぞ！」

「十秒後に撃つ。それまでにどげんかくだな」

……………二……………三

「太吉！うちのことは、かまへん。はよ行き！」

「何言っちゃるんだ！言ったやろ、俺は朱音をそげんな目に合わせん」

……………四……………五……………六

「太吉！はじ——(早く)そこからどげんか！」

「敬、あはは。俺は朱音が大事だ。俺は男げな(らしい)敬にずっと憧れちよった。今、それが試されちよると思う。だから、あははな」

……………七……………八……………九

「ふん。変な自尊心なんて持ちやがって」

……………十……………

バババババツツ

米部じいは、容赦なく僕と朱音を目がけて銃を撃ち放ちました。米部じいが立ち去り、後ろで目を伏せていた敬は恐る恐る目を開けると、ヒイツ！と言って走って行ってしまいました。

不幸中の幸いで、僕も朱音も決定的な急所は撃たれていませんでした。しかし、朱音のほうが重症でした。

「……………朱音？ 朱音！！ いっちゃん(大丈夫)か!？」

朱音の白い服は赤い血で真っ赤に染まっている。

俺は体を起こして、朱音の頭を支えるようにして抱き寄せた。

「……………急所は、狙われんかった、さかい……………ども、ない。太吉に、こないな、血イ、流させて、しもうて、勘忍、や」

俺の左肩から流れる血をぬぐいながら、朱音は言葉を振り絞るようにして申し訳なさそうに言った。

「どない、しよけ……………こんまま、やったら、うちも、太吉も、死んで、ないない(死んでしまう)かも、しれん」

「誰かが来るまでもつか……………」

「太吉、一人やったら、どないかして、人里、まで、降りれる、やろ。うちのことは、もう、ええよ。どないせ、助からへん、もん」

「何を弱気になっちゃるのだ。何回言つよーねえ(言ったら分かるんだ)！俺は朱音を死なせん。ずっと一緒だ！」

「なら、うちと太吉が、二人とも、助かる方法、が、一つやけ、ある」

「え？どんげやって？」

「太吉は、妖狐に、なる気は、あり、はるん？」

「妖狐？俺が？」

「もし、太吉、さえ、ええん、なら、やけど」

「……………妖狐になつよーねえ(なったら)、みんなや母ちゃんには、もう会えんくなるのか？」

「残念、やけど、そう、や」

「……………今、俺が一番大事なのは朱音だ。分かった。俺、妖狐になる」

俺がそう言うと、朱音はびっくりしたような顔をしてから、ふふつと笑った。そして長いまつげをばたつかせながら、ゆっくりと目を閉じた。

「朱音？ だあ、朱音！ しっかりしろ。まだ死んだらいけん」
しかし、朱音はもう微笑んではくれなかった。

「朱音……………！」

そのとき俺たちのちようど真上から、ピカツツと光が照った。あまりに眩しくて俺は目を開けられなかった。宙に浮いているような感覚になったと自覚したときには、もう、山はずいぶんと下にあった。

俺は、ふかふかとした布団のような物の上に寝かされていた。それは昔、父ちゃんが家の布団で再現してくれたファーストクラスの座席？とか言うものに似ていた。

「な、なんじゃ!？どんげなっちゃる!？」

「お気づきにはりましたか？どうも初めまいや。私は、朱音の母親です。この度は娘がご迷惑をおかけしてしもて、どないぞ堪忍ね」

朱音は？ と思つて横を見るとやはり目を瞑ったままだ。しかし、さつきと違うのは、朱音の撃たれた部位がキラキラと光っている。ふと自分の撃たれたところを見ると、同じように光っている。

「ご安心を。そら綺麗に治りはるさかい」

状況はつかめないが、俺は言われるがまましばらく待った。すうつと光がなくなると、本当に跡形も無く傷が完治した。朱音もむくつと起きると、とびきりの笑顔で俺に向かって笑った。

「嘘や」

「……………は？」

「ふふ。ほんまに妖狐になると思たやろ？そないわけあらへん。太吉が、太吉のお母ちゃんも敬はんも大事なん知つてて、うちがそないなことするわけあらへんやろ？やて、太吉ん気持ち、確かめたかつたんや」

「たまがった(びっくり)させるなじー！俺ん気持ちなんてもう知つちよるやろ。ずーっと一緒だ、朱音」

「ほんまに？ 信じてええんやな」

泣き笑いながら、朱音は勢いよく俺に飛びついた。

「え、えっへん。ちよい、お二人はん。二人で燃え上がらんといてくれまへん？」

俺たちを乗せた遊覧船のような乗り物は、妖狐の里のような所に到着した。その後俺は、今まで食べたこともないようなご馳走をたらふく食べ、村の一番大きい水だめにも勝るほどの浴槽に浸かって、ぐっすりと眠った。

多分、当時の僕にとっては一番贅沢な体験でした。その後、目を覚ますと、僕は自分の家の布団に寝かせられていました。後から聞いた話によると、敬は一目散に山を駆け下りて、村長に一部始終を伝えたものの、もう時刻が遅かったので、次の朝一に山へ探しにいったそうです。母ちゃんは僕がもう死んでしまったと思っただらしく、知らせを聞いて、まさかのショック死。次の日、山でぼくを発見した者は、ぼくは数箇所ほど撃たれたと聞いていたはずなのに、傷一つなく、さも気持ちよさそうにスヤスヤと眠っていたと言っていました。そして、その横には、ままごとセットと水の入った桶が置いてあったそうです。

米部じいはいはと言うと、敬の証言によりどんな理由であれ子供を、しかも狩猟用の銃で撃ったとして、村から追放されてしまいました。

今、僕は大好きな村を離れて獣医の仕事をしながら、僕の自慢のお嫁さんと、それはそれは可愛い僕の娘と三人で暮らしています。

実は、二十三歳の十一月二十二日に、僕は宝くじで一当選しました。

景品は何かって？それは“一番好きな人との結婚”僕にとって、一当選にとってもふさわしい景品でした。

ちなみに、結婚した日(十一月二十二日)は、みごとなお天気雨の日でした。